

令和 3 年 6 月 1 日現在

機関番号：15401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23013

研究課題名(和文) 中国と日本における漢代象数易の展開 『周易命期略秘伝』を中心として

研究課題名(英文) The study of "Xiangshu Yi" in China and Japan- Research Focusing on "shueki meikiryaku hidden"

研究代表者

藤田 衛 (Fujita, Mamoru)

広島大学・人間社会科学研究科(文)・助教

研究者番号：20850150

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、象数易が如何なる理論を持ち、それが日本にどのような影響を与えたのかを検討するのが目的であった。象数易とは、中国古代の占いの書である『易』を、象徴と数理によって解釈する方法論のことである。まず、象数易に関係する易書を検討し、その版本の特徴や占法などを明らかにした。次に、現在、日本に伝わる『周易命期略秘伝』を収集し、内容を検討した。その結果、『周易命期略秘伝』は、百衲本と単行本に大きく区分けできることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

象数易に関係する易書を検討し、その版本の特徴や占法などを明らかにしたことは、今後、象数易の基礎研究として重要な貢献を果たすものだと考えている。特に、『周易命期略秘伝』は、これまで明らかにされてこなかった象数易の日本への影響の解明に相当の学術的意義があるものと考えている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study is to examine what kind of theory Xiangshu Yi(象数易) has, and what influence has had on Japan. Xiangshu Yi is the method of interpreting I-ching(易经), which is an ancient Chinese divination text, by using symbols and mathematics. First, I researched texts related to Xingshu Yi and clarified the characteristics of the printed books and their divination methods. Next, I collected "Shueki meikiryaku hidden(周易命期略秘伝)", which has been handed down in Japan, and examined its contents. As the result, the books can be into two parts: "Hyakuno ou(百衲本)" texts, independent texts.

研究分野：中国哲学

キーワード：象数易 易经 日中交流

1. 研究開始当初の背景

漢代易学は、象徴と数理をもって『易』を解釈する、いわゆる象数易を特徴とし、後世の易学の礎となった。しかし、その研究はきわめて低調であり、漢代易学の継承や技法などを論じた鈴木由次郎『漢易研究(増補改訂版)』(明德出版社、1974)からそれほど進展していないのが現状であった。

研究代表者の藤田は、前漢末以降に成立したとされる緯書の中の『易』の解釈書に当たる『易緯』について研究してきた。その中で、日本に伝わる『周易命期略秘伝』を見出した。『周易命期略秘伝』には、『易緯』に非常に近い記述が見え、象数易を利用した占術の日本での運用例も記載されていた。しかし、『周易命期略秘伝』については、ほとんど研究されてはいなかった。その一因には、象数易の研究が十分に解明されていなかったことが挙げられる。そこで、象数易が如何なる理論を持ち、それが日本にどのような影響を与えたのかという問題意識のもと、象数易および、『周易命期略秘伝』の研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究は、漢代象数易が如何なる理論を持ち、日本にどのような影響を与えたのかを分析する。象数易には、いまだ解明されていない技法や占法がある。資料の入念な読解により中国における象数易の展開を理解するとともに、日本に伝わる『周易命期略秘伝』を通して、日本で象数易を利用した占術がどのように利用され、影響を与えたのかを究明することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 象数易の分析は、『易緯』や『焦氏易林』『周易集解』といった易書の読解を通して行う。

『易緯』は、漢代象数易を代表する京房の易学の影響が大きい。加えて、後述の『周易命期略秘伝』には、『易緯』に由来する易術が記載されており、その内容の解明には、『易緯』の考察が不可欠となる。それゆえ、まず『易緯』に見える易説の解明を行う。『焦氏易林』は、京房の師である焦延寿の著作とされ、完本として現存する数少ない漢代成立の易書である。その現存本の系統・特徴を考察し、どのように占われてきたのかを解明する。『周易集解』は、唐の李鼎祚の編纂であるが、漢代易注を大量に引用し、漢代易学を理解する上で貴重な書物である。『周易集解』は、複数の版本が残されており、それぞれ相違しているところも少なくない。そこで、『周易集會』の流伝と現存本の特徴を考察する。

(2) 現在、残されている『周易命期略秘伝』は、室町時代の人である桃源瑞仙の著『百衲襖』所収の単行本とに分けられる。まず、学術研究機関に所蔵されている『周易命期略秘伝』の調査収集を行い、諸本の検討を通して、系統や形成過程を分析する。次に内容の検討に移り、特に『易緯』に由来する易術の構造を解析し、日本でどのように運用されたのかを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 『易緯』の一篇、『易緯通卦驗』の二十四節気・七十二候が如何なる構成であったかを検討した。漢代では、二十四節気の構成には二系統あった。驚蟄を正月中、雨水を二月節とする説と雨水を正月中、驚蟄を二月節とする説である。『易緯通卦驗』は、雨水を正月中、驚蟄を二月節とする二十四節気を採用していた。『易緯通卦驗』が記載する七十二候は完全には残っておらず、佚文として伝わるだけであるが、『逸周書』時訓解や正光暦、大衍暦の七十二候と異なっており、李溉卦気図の七十二候とも相違していた。『易緯通卦驗』の七十二候が如何なる構成であったかを知るために、成化閣本『開元占経』巻九三「七十二候当候不候」に引く『易演』の文に着目した。その『易演』は、七十二候と七十二候が至らなかった場合の災異を記していた。それは、『易緯通卦驗』とほぼ合致していた。そのことから、『易演』の七十二候こそが、『通卦驗』が採用していた七十二候だと推測した。

『焦氏易林』の占法について検討を行った。まず、現存する『焦氏易林』の諸本の特徴を考察した。現存する『焦氏易林』には、元抄本・明刻本・校宋本の三系統が存在していた。伝存している『焦氏易林』の中では、元抄本が最も古い。黄丕烈が刊刻した校宋本もまた、元抄本系統に由来しているのではないかと考えられた。明刻本は、彭華本を底本とした姜刊本に源を発する。姜刊本以降の明刻本は、姜刊本を訂補が施された本である。明刻本は、黄思伯の「校定焦氏易林序」が付されていることもあり、黄思伯校訂以降の本に由来すると考えられた。元抄本と明刻本の内容には、大きな隔たりが存在しており、その原因の一つには、元抄本は黄思伯校訂以前の本、明刻本はそれ以後の本であることが考えられた。『焦氏易林』の占法に関しては、宋代までに少なくとも三種類存在した。一つは、『易経』と同様に筮竹を使って卦を導き出す法、二つ目は、分卦直日法によって卦を導き出す法、三つ目は、易筮法と分卦直日法を組み合わせた法である。分卦直日法を用いた占法は、成立当初の占い方であったか極めて疑わしく、宋代ごろに好事家によって案出された占法であったと推された。

『周易集解』の版本の系譜の検討を行い、現行本の『周易集解』の源流は、北宋慶曆本に求められた。南宋に至って、鮮于侃がそれを重刻し、その子の鮮于申之が大字をもって刻した。それ

が嘉定大字本である。明清で言われる宋本とは、嘉定大字本のことを指す。明清の版本では、雅雨堂本以前と以後に分けられる。雅雨堂本以前の版本である明の聚楽堂本や秘冊彙函本、津逮秘書本は、基本的には嘉定大字本系統の本を底本とする。一方、雅雨堂本は、明刻本を底本とするも、恵棟の校訂が反映されている。それは宋本の原貌を失わせたと非難されるように、それ以前の版本とは様相を異にするものである。それ以後の諸本は、雅雨堂本の影響を受けていないものはない。『周易集解』を讀解する際、雅雨堂本以降の版本には恵棟の校訂の影響があることに注意が必要であることを指摘した。

(2) 日本に現存する『周易命期略秘伝』(以下、『命期略』)の諸本の調査収集を行った。コロナ禍の影響もあり、すべては調査収集できなかったが、確認できた諸本は以下の通りである。

○単行本

慶応義塾大学 A 本(室町後期写)

慶応義塾大学 B 本(室町後期写、足利学校旧蔵)

大東急記念文庫本(室町後期写・慶長補写、東京大学史料編纂者蔵写真版)

酒井宇吉旧蔵本(室町後期写、東京大学史料編纂者蔵写真版)

広島大学本(室町後期写、附旧抄本『周易正義』)

天理図書館本(室町後期・吉田兼右写)

天理図書館吉田文庫本(江戸初期写)

早稲田大学本(江戸後期写)

○『百衲襖』所収本

建仁寺両足院本(23冊本)

東京大学史料編纂所本(謄写抄本、1冊本)

京都大学 A 本(23冊本)

京都大学 B 本(17冊本)

京都大学 C 本(2冊本)

慶應義塾大学本(19冊本)

蓬左文庫本(19冊本)

また、『周易命期略秘伝』に関連する書物としては、以下のようなものがある。

○『周易命期経』

関西大学長澤文庫本(室町後期本)

叡山文庫真如蔵本

○『周易大命期経』

建仁寺両足院本(室町後期、和仲東靖写)

国立国会図書館本(江戸貞享四年、小林半兵衛)

蓬左文庫本(二冊、室町写)

○『周易図暦略訣』

京都大学本(室町後期～江戸初期・清原枝賢・国賢等筆)

○『命期秘伝』

京都大学本(室町後期・清原宣賢自筆本)

現存する『命期略』には大きく分けて二系統ある。一つは単行本、もう一つは『百衲襖』所収本(以下、百衲襖本)である。それらは、基本的には内容を一にするのだが、百衲襖本には単行本にはない記述が多々見られる。その原因は、百衲襖本の編纂過程に由来する。桃源瑞仙の記すところによると、牧首座が抄写した五冊の内の『命期訣』、三善行康が大儒定安本を抄写した『命期秘抄』、柏舟宗趙の『命期経』、以上、三本を校讎し、短を捨てて長を取り、彼本の闕は此本で補い、この冊を綴った、と言う。百衲襖本は、単行本の『命期略』を含めた複数の本を綴合したものであった。

『命期略』では、まず表題が置かれ、次に『周易命期経』が引かれ、二字ほど下げて注釈が記述されている。その『周易命期経』は、「釈師英命期経」、「李淳風命期経」あるいは「隱君子命期経」として引かれている。李淳風(六〇二年 六七〇年)とは、初唐の人で、高宗の時に麟徳

曆を編成した人物として著名である。ただ、中国の目録等には、李淳風に『命期経』の著作があったとは一切見えない。釈師英については、判然としないが、初唐の太宗・高宗年間の人物で、李淳風と同時代の人である成玄英を指す可能性がある。その『周易命期経』の内容を検してみると、唐の年号である永徽元年（六五〇年）・麟徳二年（六六五年）・乾封元年（六六六年）等が見られる。その中で最も新しい年号は、乾封元年である。『周易命期経』は、唐の高宗ごろに成ったと推測される。『命期略』の注釈には、中国の書籍からばかりでなく、日本で書かれたものもある。例えば、『命期略』の巻頭の「推御軌積年法」の注にみえる「自天元甲寅至本朝元暦元年」の「本朝」とは日本のことを指し、「元暦」は後鳥羽天皇の時の年号である。『命期略』は、日本人が『命期経』を基礎として様々な漢籍からその易術の要点をまとめた書だと言える。

『命期略』には、『易緯』に由来する易術が多く記載されている。さらに注目されるのが、現存する『易緯稽覧図』の巻下と内容を同じくしていることである。現行本『易緯稽覧図』は、上下二巻で構成され、注は鄭玄注とされている。しかしながら、巻上は、成立当初からの『稽覧図』の内容を保持していると考えられるが、巻下は、劉宋・北魏そして唐代の年号が見えるなど、後世の付け加えである。『稽覧図』巻下と『命期経』は、由来を同じくしていると考えられる。『周易命期経』は、李淳風や釈氏英といった人物の著作とされ、唐初の著作だと考えられた。『稽覧図』巻下もまた、唐の年号が見られ、唐代の書物が大本だったと考えられる。ただ、『周易命期経』が高宗間の作だとすると、『易緯稽覧図』巻下はそれより後の成立だと思われる。『易緯稽覧図』巻下は、『周易命期経』かまたは同等の本が加筆増補されていった本が元であったのではないかと思われる。『稽覧図』巻下は脱誤が多く、『命期経』によって理解できるところが少なくない。また『命期経』にはあって『稽覧図』にはない記述、反対に『稽覧図』にはあって『命期経』にはない記述もある。『命期経』と『稽覧図』巻下は、互いに参照することによって補完しうる関係にある。

『周易命期略秘伝』に関連する書物について、以下、その内容の概略を述べておくことにする。

『周易命期経』について。関西大学長澤文庫本は、『周易命期経』という書名であるが、李淳風等の『命期経』そのものではない。『命期略』と一致する部分が多くみられる。ただ巻頭に「筮時請神文」「送神文」が記録され、次に「筮儀 新安後学 胡一桂 集」とあるのは、『命期略』にはないものである。なお、叡山文庫真如蔵本は調査できなかった。

『命期秘伝』は、京都大学所蔵の『清原家家学書』34種中の一種である。清原宣賢(1475-1550)の筆とされる。京都大学貴重資料デジタルアーカイブにて公開されている。その主立った内容は、乾・坤から既済・未済までの六十四卦各爻それぞれの命期すなわち寿命を記したものである。

『周易大命期経』について。蓬左文庫本は、末尾に「自天元甲寅歳至大永五天」とあることから、大永五年（一五二五年）頃に書写されてものと推測される。その内容は、各六十四卦三百八十四爻での年齢での吉凶と寿命を列記する。『命期秘伝』が記す寿命とは異にしており、また別系統だと推される。『周易大命期経』は、『命期経』から派生した書だと考えられるが、『命期経』にはない内容も見られる。その元とした本については詳らかでない。国立国会図書館本は、『周易大命期経』の和刻本と言える書物で、仮名で読みを付けてあることが特徴である。奥書によれば、小林半兵衛が京都で貞享四年（一六八七年）に刊行した本のようなものである。

『周易図暦略訣』は、京都大学図書館に蔵せられている。清原枝賢・国賢等の筆とされる。前半は『命期略』の抄録、後半は永享二年（一四三〇年）から慶長十九年（一六一四年）までの二十四節気の日当表である。『周易図暦略訣』は清原家で受け継がれ、後半部分は代々書き足されていったと考えられる。末尾の「周易本卦事」「周易御命期運数事」といった占例は、他書には見られない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤田衛	4. 巻 49
2. 論文標題 『易緯通卦驗』の二十四節気・七十二候	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 pp.25-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤田衛	4. 巻 50
2. 論文標題 漢代易学興亡史稿(上)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 pp.21-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤田衛	4. 巻 78
2. 論文標題 李鼎祚『周易集解』の流伝	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 汲古	6. 最初と最後の頁 pp.14-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤田衛	4. 巻 102(4)
2. 論文標題 『焦氏易林』占法考 現存本の系統と特徴を踏まえて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋学報	6. 最初と最後の頁 pp.1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 藤田衛
2. 発表標題 『周易命期略秘伝』初探 『易緯』研究における資料的価値
3. 学会等名 緯書と漢代經書學（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------